

那珂川町の文化財 IX

— 中原・ヒナタ遺跡群の発掘調査 —

1997年

那珂川町教育委員会

はじめに

新幹線の駅として、近年、那珂川町の玄関口にふさわしく模様替えしようとしている博多南駅前。

そうした新たな開発計画に伴い、数年にわたって広い範囲を掘り起こしてみたところ、縄文時代から奈良時代に至るまでの遺跡が数多く見つかりました。特に、各時代に営まれた集落の発見は貴重な成果といえ、その移り変わりを見ていくと、いつの時代もこの周辺は人の動きが活発であったことが伺えます。

古代社会にあっても、新たな文化の受け入れ口であつたであろうこの博多南駅前。さて、一体どのような生活の営みがこの地でなされていたのか、これからみなさんと一緒に見ていくことにしましょう。



縄文時代に掘られたもので、貯蔵穴といえます。おそらく食料を保存するために使っていたのでしょう。

古墳時代に使われていた井戸。直径が3mと大きなもので、中からは祭りに使った土器が多く見つかりました。



出土した土器から、約3000年前の住居とわかりました。まわりには屋根を支えた柱の跡がよく残っています。



奈良時代の掘立柱建物。柱や屋根はすでに壊れてなくなり、現在は柱の跡だけが並んで残っています。



奈良時代の土葬の跡で、土坑墓といえます。中には、死者が生前に使っていた食器などが供えられていました。



南北に延びる長い溝の中から、この地方では珍しい形をした首の長い壺が、完全な状態で出土しました。

中原・ヒナタ遺跡群

— 縄文時代のころ —



- ① 石の道具をつくるのはむずかしいけれど、とても大切な仕事。ムラでは、石器づくりの名人が細工のコツを子や孫へと伝えていきます。
- ② 海辺から運ばれてきた貝は、土器の中でゆでて干しておきます。こうしてできた干し貝は、冬など食糧が不足するときの保存食として利用されました。
- ③ 土器をつくる手順は、まず粘土をこねて形をつくり、模様をつけます。そしてそれを乾かした後に焼いて、できあがりとなります。
- ④ 遠く平原では、ムラの男たちが石ヤリをふるい、シカの群れを追っています。



▲縄文時代後期の住居跡（直径3m）



▲住居や土坑から出土した土器片
表面に、縄文後～晩期に特有の文様が残る

今からおよそ12000年から2300年前頃までの間を縄文時代といいます。

この時代の幕開けに、人々は土器を発明しました。土器で煮たきをすれば、アクが強く、それまで食べられなかった木の実を食料にすることができます。干し貝などの保存食をつくることもできます。土器の発明が、人々の食生活を格段に豊かにしたのです。そうして食糧事情が安定してくると、人々は獲物を追って暮らす移動生活をやめて一か所に定住し、まとまった集落をつくるようになりました。町内では、このような早い時期の集落跡が深原遺跡で発見されています。しかし、それ以後およそ5000年の間に人が暮らした痕跡は、町の周辺だけでなく九州全域においてほとんど見つかりません。これは火山の爆発や異常気象が原因で、当時の人口が激減したことによるものと考えられています。それから人々が暮らしを立て直し、

新たに集落を営むようになったのは、縄文時代も後半に入ってからのことです。中原・ヒナタ遺跡で発見されたのもその一つで、たてあな しきじゅうきょ ちよ ぞうけつ ど ころ 竪穴式住居や貯蔵穴、土坑などの生活遺構が調査できました。残念ながら、周囲をかなり削られていて集落の全体は知れないのですが、そうしたこれまでの発掘調査の結果によって私たちは、今から3000年前にこの広い一帯にムラができ、人々が生活していたのだらうと想像できるようになりました。

最後に、本町における縄文時代の集落の発見は、山田西遺跡に次いで二例目となりますが、九州全域での発見は数えるほどしかありません。資料が乏しいこの地域の縄文時代の研究も、今回の調査でまた一歩、前進できるのではないのでしょうか。



◀前ページの写真の住居から出土した。口径45cm、高さ40cmをはかる。

▲住居から出土した甕（かめ）



▲黒曜石で作られた石器（矢じりと石刃）
左はしの矢じりの長さは2.6cm

中原・ヒナタ遺跡群

— 奈良時代まで —



木棺墓 ▶

死者を木の棺に
いれて埋葬したも
の。長さは2.5m
あり、須恵器や土
師器などの日常
で使う食器が大
量に見つかった。



▲棺の中に供えられた土器
中央背後のフタの直径15cm

縄文時代から弥生、古墳時代を経て奈
良時代に入ると、縄文の集落よりも南東
へはなれた場所にまた大きな集落が営ま
れるようになります。

今回の調査では、母屋らしい掘立柱の
建物と、倉庫のような建物がいくつかま
とまって見つかりました。

また、これら住居群から西へ外れたと
ころでは、土埴墓や木棺墓が集中して見
つかり、当時の人が住居地と墓地をどの
ように区画していたかがよくわかる資料と
なりました。

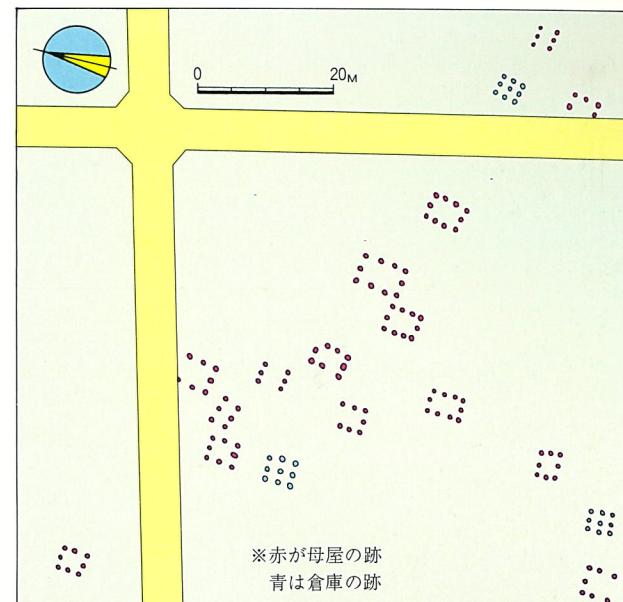
ところで、奈良時代以降の生活遺構は、
わずかしは見つかっていません。というこ
とは、奈良時代以降はもっぱら田畑とし
て利用されたのでしょう。その集落も、現
在の中原の集落に近いところに移ってい
ったと考えられます。

◀ 奈良時代のムラの想像図

右の柱の跡から掘立柱の建物を想像
し、約1200年前の博多南駅前の様子
を復元してみました。あくまでも想像で
すから正確な図ではありませんが、当
時の農村の風景はこれに近いものでは
なかったでしょうか。

掘立柱建物の配置図 ▶

建物は全て同じ方角を向いています。
人の住む建物と倉庫でなっていると思
えられます。限られた範囲の調査なので、
このように一部しか発見できませんが、
本来はこういった建物群がさらに広がり、
一つの村を形成していたことでしょう。



▲井戸に供えられた土器

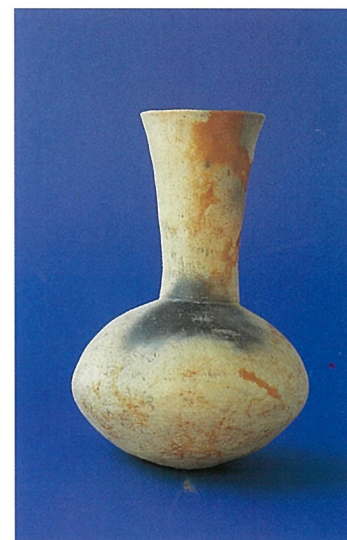
このほか、調査区の西辺では井戸や溝の跡が見
つかりました。出土品は古墳時代前半の土器が多く、
中でも注目されるのは、溝から出土した細頸壺と竹
管文という文様がついた壺片です。竹管文がついた
土器は、山陽地方、今でいう広島、岡山でつくられ
ていた土器とそっくりなもので、那珂川町と山陽地
方が交流を重ねていた証拠として一級の資料だと
いえるでしょう。今回の調査では、住居跡を確認で
きななかったものの、これら遺物や生活遺構の発見が、
古墳時代の集落が付近にあった史実を裏付けてく
れました。

口縁下に小竹の
切り口でつけた文
様が残る。

◀ 手前右はしの土器
の高さは13.5cm



▲二重口縁壺の破片



▲細頸壺 (2ページの写真が出土状態)
高さは21.5cm

那珂川町の文化財Ⅸ
—中原・ヒナタ遺跡群の発掘調査—
1997年

発行：那珂川町教育委員会
福岡県筑紫郡那珂川町西隈64-1

印刷：瞬報社写真印刷株式会社

写真：中原・ヒナタ遺跡群（西から）

